

ニガウリ（普通栽培）

田中 義弘

葉は適宜除去しよう



ニガウリは沖縄県では「ゴーヤ」、鹿児島県ではウリを「ゴイ」と呼ぶことから「ニガゴイ」と呼ばれ、以前は地域特産野菜として夏場を中心に消費されてきました。最近では全国的に「ゴーヤ」の呼び名が一般的になり消費も拡大しています。果実には、ビタミンCが多く含まれ、苦味成分には健胃と鎮静作用があり、食物繊維も豊富で食欲を増進させ夏パテ防止によいといわれています。

ニガウリは、大きく二つの仕立て方法で栽培されています。一つは、ブドウ栽培のように棚を作る**棚仕立て**、もう一つはキュウリネットを垂直に張る**垣根仕立て**です。今回は、取り組みやすい垣根仕立ての普通栽培を紹介します。

種まき時期は3～4月、定植時期は4～5月。ニガウリは硬実種子で、種皮は厚く硬いため吸水しにくく、発芽適温も高いため、発芽ふぞろいが発生しやすいです。種子のとがった方の先端を爪切りなどで穴が開く程度に切断し、水に数時間から一晩漬けると発芽がそろいやすくなります。10.5センチの育苗ポットに種まきし30日程度育苗後に、本葉3、4枚で定植します。

本ぼは1平方メートル当たり苦土石灰100グラム、堆肥3キログラム、緩効性の化学肥料100グラム（チッ素、リン酸、カリ成分各15%の場合）を目安として施します。床幅1メートルに黒ポリをマルチします。株間2メートルくらいが適当です。定植と同時にイラサ竹などで仮支柱を立てます。肥料袋などで株の周囲に行燈を作り風よけをすると植え傷みが少なくなります。

定植から2週間後を目途に仮支柱をはずし、うね中央に2メートル間隔に高さ2メートルの支柱を立て、キュウリネットを1列張ります。**親づるは10節程度で摘心**します。子づるは4～6本、ネットに立ち上げ、左右にできるだけ均等になるように誘引します。その後、ネット最上部に達したら摘心します。孫づるは放任とします。

着果は子づるの10節以降からとしますが、受粉は昆虫が活発になるまでは、雄花を用いた人工受粉が必要です。着果数が多いと果実の形が乱れ変形果が発生しますので、1果当たり5枚程度の葉数を目安に摘果します。葉が混み合うと病気の発生や果実の色が淡くなったりするので、**古い葉や混み合った部分の葉は適宜除去**しましょう。

受粉後20日前後で収穫できますが、気温の高い時期は肥大が早く収穫後果実が黄化しやすいので**朝の涼しいうちに適期（長さ30センチ太さ6センチ、重さ250グラム程度）に収穫**しましょう。

（鹿児島県農業開発総合センター園芸作物部野菜研究室 主任研究員）

ニガウリの普通栽培

